



退
廢
的
設
定
資
料
集

画 作
思 春
棄
じろう・ほん・ほん

灰出町観光協会広報

皆さんのが何気なく生活している灰出町ですがその歴史は古く、今年度を持ちまして当時の「灰出村」から「灰出町」へと名前を変えて丁度百年目の節目の年となります。

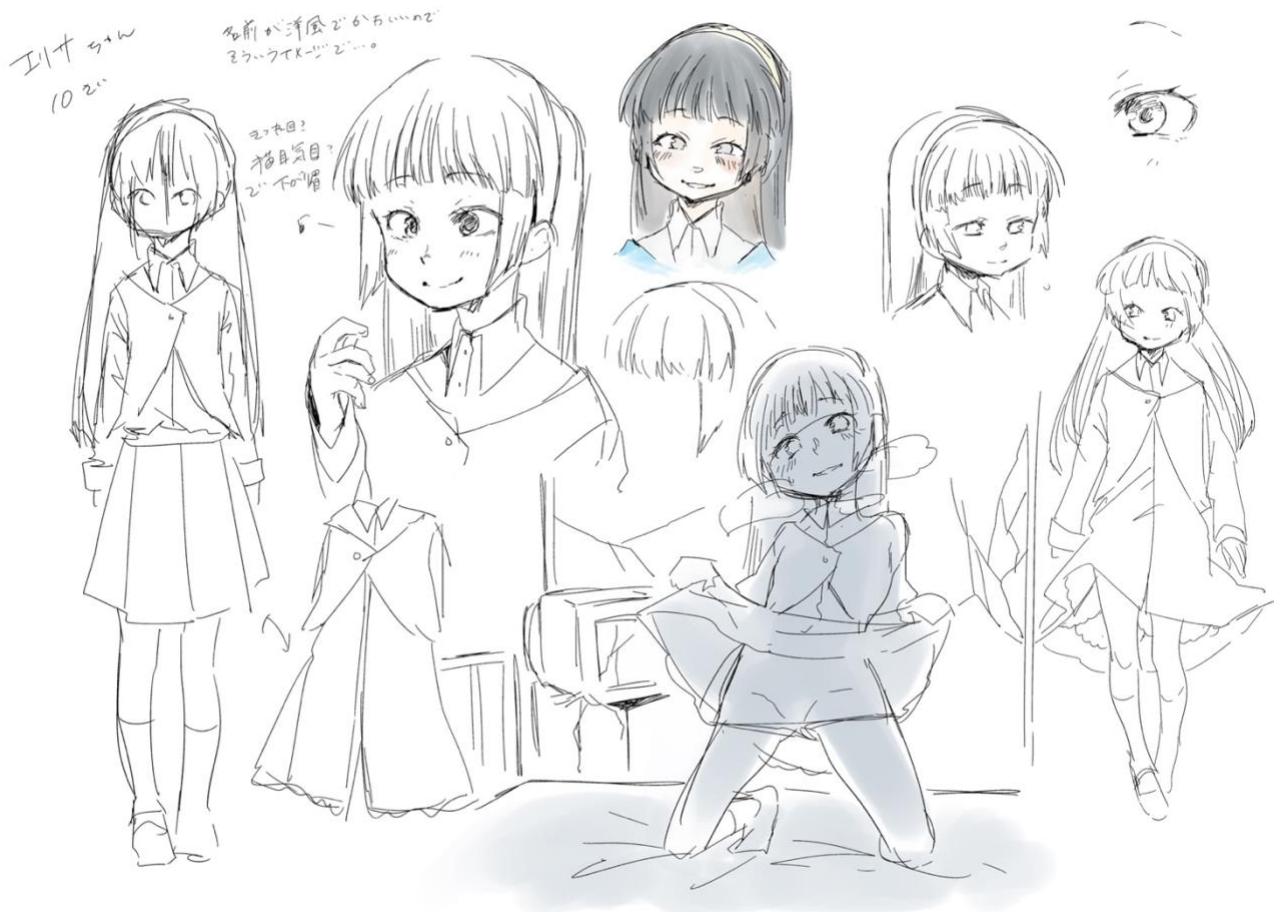
人々、この「灰出(はいいで)」という地名は、近隣の山での炭鉱を中心とした採掘業が盛んに行われた事で「山からの煙と灰の出る活気ある村」と呼ばれ「灰出村」と名付けられました。現在では皆さんのが生活にはあまり馴染みの無い採掘業ですが、一時期は村の財源を担う重要な職業であり、江戸の時代から長く村を支えていたようです。

しかし、長らく続いた産業も明治の頃には陰りを見せます。記録的洪水の影響により村落は甚大な被害を受け、この災害を切っ掛けに灰出村は急速に過疎化の一途を辿る事となってしまいました。ですが明治維新以降、大正時代を経て。戦争と激動の時代の果てに経済発展が大きく進んだ事により土地の環境開発などが進み、昭和後期復興の後に都市開発が行われ現在の町の姿となり今日に至ります。

当時の洪水や戦争による損壊を免れた建物などは歴史的建造物とされており、改修された古民家などは一部が宿泊施設として利用されているものもあります。これらは「座敷わらしが出る」などといった不思議な言い伝えや、狐の神様を祀った複数の神社など。様々な民話と歴史の断片が今もなお色褪せずに残り続けています。

山間には外来種のエリカの花が群生しており、秋から冬にかけて見ごろを向かえます。大正時代に日本に正式に持ち込まれたというエリカの花ですが、灰出の地域では持ち込まれる以前から咲いていたとの文献もあり、益々不思議な魅力に目が離せません。日頃の喧騒から離れて、そんな歴史と自然に思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

灰出町内会長 橋



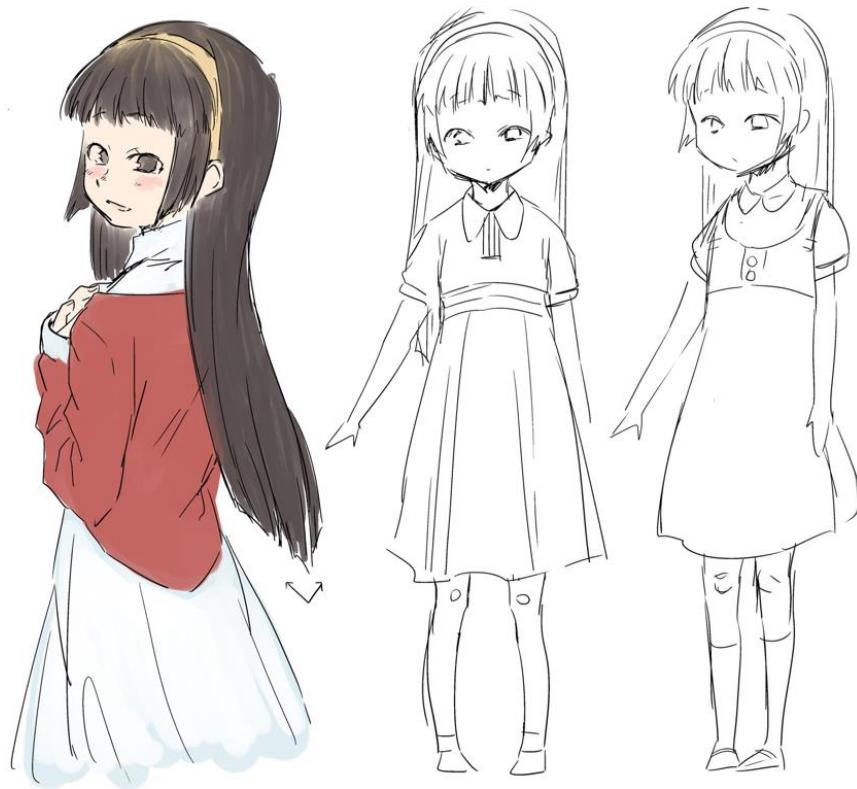
「退廃的廃屋少女」は、あなたの記憶です。

ねえ…私を覚えてますか。

小さな頃にあなたと沢山遊んだの。

本当に…覚えていないですか……？

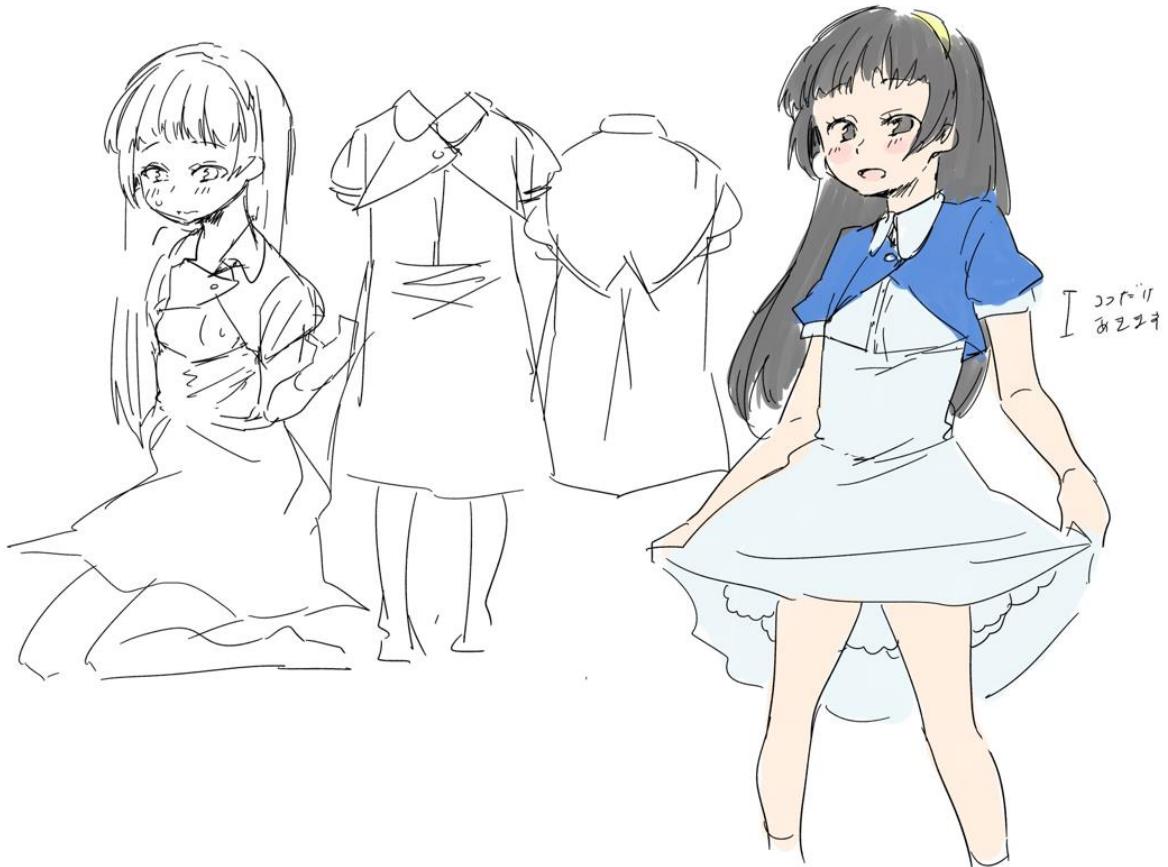
これはあなたの心の底に沈んだ古い思い出…



「退廃的廃屋少女」をはじめて聴いた方は、自分を「お兄さん」と弱々しく呼ぶ少し他人行儀なえりさの姿にどこなく不思議な印象と違和感を抱くはずです。…と言うのも、この作品はループして聴いて頂く事で少女がどのような存在なのかが明確になりますので、最初の他人行儀な言動には「自分が妹である事実に気付いてほしい」という主人公である聴き手に対してのほんの少しの希望を抱いているからでもあるのです。

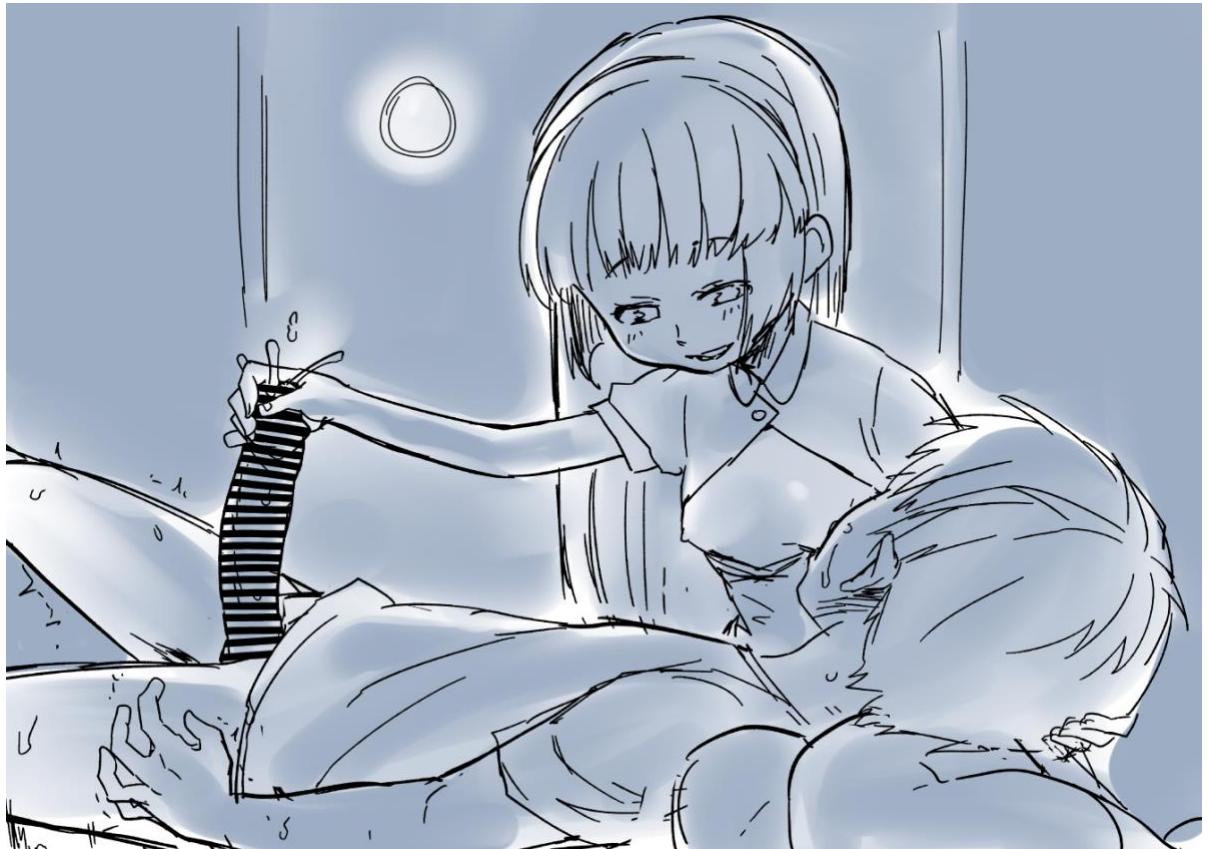
しかし、勿論のこと。この作品を初めて聴いた方は、えりさとの関係性を知る由もありません。本来の意味での「何も知らない状態」で作品に没入する事で、断片的なえりさとの関係性が徐々に明確になる。このように物語が進むに連れて目の前のえりさに対して少女相応の無邪気さを感じていく事で、徐々に聴き手と少女の間にある緊張感が緩和していく。そんな文章構成を考えながら執筆しました。

聴き手が少女のあどけなさとは無縁の手解き受けいれる頃には、最初に抱いていた違和感はどこかにいしまっていますし、そして作品を最後まで聞くことで感情を露わにしたえりさが「お兄さん」から「お兄ちゃん」へと呼び方が変わったといった、親密な間柄を感じさせる単語を散りばめる事で親しみを感じて頂けるような工夫を施しました。



物語終盤には聴き手は冒頭でも示唆した「前にここにきたお兄さん」という存在が自分であること。記憶を失って何度もえりさと出会っている事実に気付くような構成なのですが。ここで初めて作中の存在である「聴き手である主人公」と「兄である存在」の乖離が発生し、再度この音声作品を聴く事で少女に抱いていた違和感が、悲しみや期待から生じる儂さによるものだったという真意を理解できます。

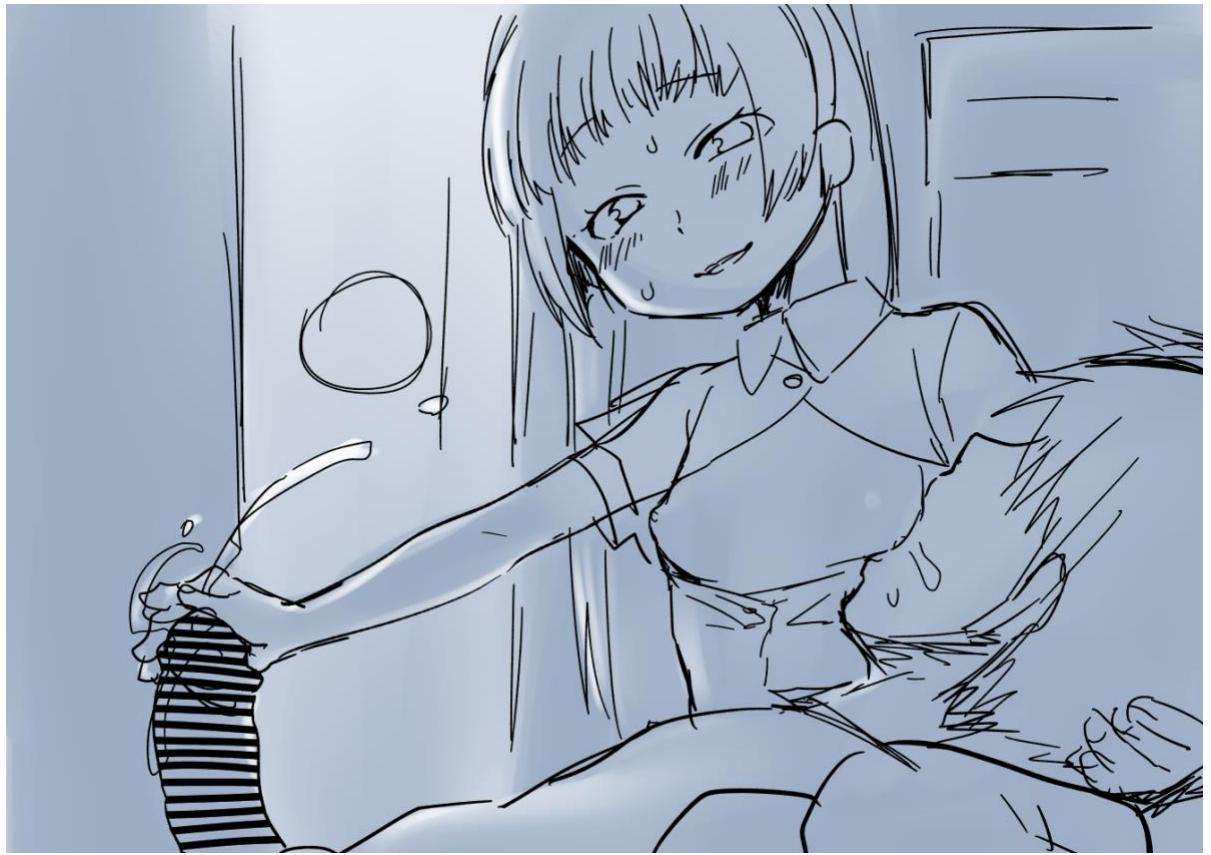
そのようにして再度作品を通して見る事が出来るえりさは、一貫して父と母そして兄の帰りを待つ少女として描かれており、どうあっても主人公である聴き手は夢の中しかえりさと出会う事が出来ません。これは、えりさは文字通り家族と自分の居場所である家に想いを寄せるあまり、長い時間の間その場所にとらわれ続けているといった表現のひとつでもあります。聴き手が「退廃的廃屋少女」をフィクションと感じれば感じるほどに、自身が再生をしない事で作品が取り残されて風化していくといった何とも言えない寂しさを与えています。



作中ではあまり長々と語られなかった事なのですが、冒頭において屋内で一晩を過ごす事を促したりするシーンにもこういった意図があります。このえりさの居場所である夢の中の世界は、作中にもあった「血族のみに伝わる呪いの力」のひとつで構成された幻覚でもあるのですが、実のところこの力の制御は不完全であり、兄である主人公の目が覚めてしまう…あるいは家の中から出てしまうと効力を失ってしまうといった側面があつたりします。

この、兄である主人公が外に出てほしくない。といった意図をさりげなく与えることで、この場所から離れて欲しくないという意識を緩やかに与える材料となっています。スイッチひとつで作品の時間は止まってしまうワケですし、同じ作品でありながら多角的視点で物語が楽しめるという面白さを楽しむというコンセプトだったので、これが上手く聴き手に伝わっていれば僕としてはとても嬉しいポイントではあります。

やはり、音声作品という目を閉じて耳からの情報が主となる表現媒体ですので、小説など他のコンテンツで物語を後から補完をするといった事はあまりしたくはありませんでした。なのであまり逸脱し過ぎずに、あくまでも音声作品の中だけで物語が完結するという点を常に大切にしています。この設定資料集も作品の根底にある歴史を紐解くひとつの回答として「こういう考えもあったんだ」くらいの捉え方でお楽しみ頂けますと重畠です。作品を聴いて頂いた方々それぞれの答えがあつても僕はいいのかな。と常日頃から感じております。





2018年12月の段階では未発表ですが今後の退廃的シリーズの作品として、まず直近にえりさとよく似た姿をした少女の物語「希望的観測少女」を予定しています。この音声作品も勿論、単一の情報だけで物語が完結するような構成を考えています。

ヒロイン二人のキャラクターには髪飾りに共通の鈴が付いておりまして、この鈴の音を用いた既視感などの工夫は「退廃的廃屋少女」を知つていればさらに楽しめる…といった演出を考えています。お察しがよろしい方にはこの少女が一体えりさにとってどのような存在なのかも、わかつてしまうかもしれませんね。

どの音声作品から世界観を知つても、違和感を抱かずに興味を持つてもらえるように。丁寧な構成を目指して執筆をしておりますので、そういう点と点が線になるような面白さをこちらの作品からも感じていただき、灰出村とその一家に関してもお楽しみ頂けますと嬉しいです。



そうして他の作品を知ったときに「もしかしたらこの作品のキャラクターと…この作品のキャラクターは…」という付加価値を楽しんでいただけますと、より作品に没入が可能になるかと思います。ですので、ストーリーや台詞の断片から大きな全体像として世界観を楽しんでいただけるのを僕も心から楽しみにしています。

シリーズを通して「○○的～」というひとつのくくりにしているのも、自分の中では意味合いがあつたりなど、まだまだ色々な構成やこの後の展開も考えておりますが、あまりここでお話ししまっても興が削がれてしましますので。そこは年に数回発表する作品を通して少しずつ触れて頂ければと思います。これからもこうして作品の行方を示していきたいますので、暖かく見守って頂けますと嬉しいです。これからも末永くよろしくお願ひ致します。ケロケロまたね。



この本を手に取っていただきありがとうございます。退廃的廃屋少女・希望的観測少女の作画を担当させていただいたサークル「思春棄」の すがる春です。

退廃的廃屋少女は世界観や構成、シチュエーションなど……本当にたくさん提案させていただきました。特にえりさはビジュアルをほぼ一任させていただいたこともあり、自分にとつても本当に愛おしい少女です。

このシリーズの次回作の希望的観測少女は(のいじろうさんも記していましたが)単一で完結する物語です。ただ、退廃的廃屋少女の世界観をお見せできれば、より楽しんでいただけると自負しております。

2人の少女が、誰かの心に残ってくれることを願って。

すがる春

児戯井底

山中に灰出村(はいいでむら)という小さな村がある。ほんの数十名の村ではあるが、鉱山での採掘で額を真っ黒にさせながら一日の仕事を終える男達とその帰りを待つ女達は、昔からこの村のどこにでもある風景だった。春になれば山桜が風の悪戯を受けて美しく散り、夏であれば夜毎に星に想いを馳せて。秋の夕暮れには川辺に舞う赤とんぼを追いかけ、冬の静けさに深々と雪が積もれば明朝の霜の白さにまだ見ぬ花と風を待つ。

灰出村の隅に住む血族は巫女の家系だ。代々当主の巫女は狐をその身に宿し、春夏秋冬の訪れには吉凶を呪い村の発展に尽くし続けた。先祖から脈々と続く祈祷の儀は村では恒例の催しであり、村に住む人々も彼女達を信頼していた。

ある年の春、巫女であるえりかはいつものように狐を呼んだ。亡き母から直々に受け継いだ祈祷は今年も滞る事もなく行われる手筈であった。しかし、その日は何度も狐を呼んだが応えることはなく。遂には日没を迎えるも狐はやつては来なかつた。村の者たちも「珍しい事もあるものだ。巫女様にも調子の悪い時もあるだろう。」との事でその年の春の祭事は中止となつたのだが、その内心で一番の戸惑いをひた隠していたえりかの心情を推し量れる者はその場には誰一人いなかつたであろう。

春先にそのような事があつたので、このまま夏にも同じような事があれば村民に申し訳が立たない。この日を境に、巫女は夜な夜な狐を口寄せをするも狐が応えぬ日々が続く。そんな母親の静かな努力を、息子と娘は家の柱の影から心配そうにそつと見守つていた。

しかし、努力の甲斐も無く。やつとの事で夏に狐を呼びだせども、狐は二度ほど宙を回るすぐに消えてしまった。村民も春の一件があつたこともあり今回も訝しげな表情をしたが、巫女の家系以外には狐を見れる者などはいない為「どうしたものか」と揶揄する者も現れた。そうして秋には村の者達も痺れを切らし、冬には巫女の子供は嘘つき呼ばわりされた。あろうことか村の子供から石を投げられる始末である。

何故、狐が突然巫女の声に応えなくなつたのだろうか。今までにこんな事は一度も無かつた。えりかは皆目見当もつかない…だが、こうなれば狐を直接問いたださねばならない。えりかは一人、村外れの社に赴きそこで禁忌を犯した。従属関係であった狐との袂を分かち、畏敬の念を忘れ、あろうことか狐との対等な関係を望んだのだ…全ては愛する家族のために。

——すると汝は吾に人間のため施せと宣うつもりか？呆れたものだ。吾は人間に今まで助言を与えてきたつもりだが、それは五穀豊穣の恵みを供物として捧げてきた事への対価に過ぎん。だが、昨今の汝等は吾に何をした。やれ採掘だなんだと現を抜かし生業である作物を育てる事すら疎かにしている。それは生命に対しての唾棄であり、吾の言葉すら軽視しているではないか。

それは…ワシもそう思う。人間は自分勝手に振舞ってばかりじゃ。だが、全ての人間がそうと言うわけではない…

——くだらん。そんな人間の戯言に吾が何故協力せねばならんのだ。汝等は吾を侮辱するつもりか？

…違う。だが、ワシにも護るべきものがあるんじや…狐よ。此度、ワシがここに赴いたのはその決意を伝えるためでもあるのじや。亡き夫と…そして何よりも愛する息子と娘がこれ以上悲しむ姿を見てはおれぬ…

——そうか。ならば、こうしようではないか。吾が人間からの対価が足りぬ分を汝から頂く。

…なんじやと？

——汝は人間の為に尽くした事を後悔するだろう。吾はその日までここで楽しませもらうとするぞ…くかか…愉快なり。

狐はそう告げると二度三度その身を宙に翻し、忽然とえりかの眼前から姿を消した。後に残るは幾ばくかの寂寥たる思いである。兎にも角にも、これで事態は好転するかもしれない。そのような心持で帰路に着くえりかの後姿では、くつくつと小さな笑い声がこだましていた。

翌春。えりかが呪いを行うと狐はひようひようとやってきて、質問につらりと答えた。巫女的一族に向けられた村中の疑念はすぐに信用へと移り変わった。まったく、わかりやすいものだ…とはいえ、これで一件落着であろう。安堵して胸を撫で下ろす巫女の姿を見て、狐は口角を僅かに上げて不気味に笑うばかりである。

一年が過ぎた冬、えりかは明らかな異変に気が付いた。自身の姿がみるみる幼くなっているのである。思い返せば春から四度と行われた呪いの儀の後に身長は縮み、体重は軽くなっていた。一年前の冬に狐の告げた「対価」とは。ああ、これこそがその代償なのだと巫女が知った時には既に遅く、日々その姿は少女へと近づいていくのだ。それからほどなくして、村の者たちはまたしても巫女への奇異な眼差しを向け始めた。

「巫女は伝染病を受けているのではなかろうか。」

「いや、我々村民の目の届かぬところでよこしまな事をしているのではあるまいか。」

「奇病の類であれば手遅れになる前に手を打たねばならない。」

「自分達の身体にも害を成すのではないか。」

「そうなれば手遅れだぞ。」

またしても巫女一族は村の者たちに避けられるようになったのだ。しかし巫女はそれでも必死に耐え忍んだ。たとえ何と言われようと、次の春にまた正しき呪いを行い吉凶を伝えればきっと理解されるはずである。村の為に、なによりも家族のために巫女である事を全うしなくてはならない。それがこの家に生まれた巫女の義務であり運命なのだと…えりかは日々ぼんやりとそんな事を考えながら床に就くようになっていた。しかし、春の祭事が行われる事はもう二度となかった。

それは雪も解け始めた春先。連日降り続く雨音を聴きながらうとうと眠りに入ろうとする晩の事である。ふいにえりかが物音のする方向を見ると、枕元に狐が佇んでいた。

——今宵は実に愉快な話をしにきたぞ。小娘。

お前様からワシに話しかけるなんぞ久方振りじやの…だが、小娘呼ばわりされる筋合いはない。ワシをこのような身体にしたのは他でもないお前様じやろうに。

——いかにも。なれど、原因は吾ではない。人の業がそうさせたのだ。そしてその呪縛も今宵が最後になるであろう。

どういう意味じや…

——時が来たのだ。元よりこの地は自然と共に存する事で生き永らえていただけに過ぎん。それを汝等が勝手に侵したのだ。採掘などという目先の利潤の為にな。今宵、それは洪水により氾濫するであろう。この村を押し流すには十分な濁流となつて…な。人に尽くした結果がこれぞ…哀れな娘よ。

なんたる…お前様、知つておいて今まで黙つておつたな…

——何故わざわざ伝えねばならんのだ？言つた筈だ。汝は人間の為に尽くした事を後悔するだろうと。吾はその日までここで楽しませてもらうとな…くかか…くかかか…

…笑うな！…たとえお前様には取るに足らん事かもしれん。じゃが、それでも人間は明日の為に日々必死なのじや！生きる事で精一杯なのじや！…言え、妖狐よ…どうすればよい。最早村の事などはどうでもよいが…ワシの子供達までを巻き込むわけにはいかんのじや…！

——愚かな巫女の末裔よ。長きに渡る縁の手向けに教えてやろう。だが、きっと汝は汝でなくなるぞ。

…覚悟の上じや。

——愚か者め…しかし、良き目をしている。…気に入ったぞ。

狐はそう言うなり巫女の身体に入り込んだ。強烈な吐き気が、眩暈が、動悸が、えりかを支配する。とても立つなどいられない。巫女はその場でのた打ち回り絶叫するが、頭の中からははつきりと狐の声がする。

——愚かな巫女よ。立て。今すぐに山に駆けろ。風の如く。

あああああああああああああああああああああああああああああああああ

——愚かな巫女よ。汝の血で吾の妖術を受け止めてみせよ。

ああああああああああああああああああああああああああああああああ

最早意識など無いままに暴れ狂う巫女の姿は、人々にどのように見えただろう。たった一人で我が子らを救おうと必死にもがく母親の姿を誰が理解したであろうか。ただ、ただ、狐の力を扱うにはあまりにも巫女には大き過ぎたのだ。その姿を見た者も、知る者も、多くの人が土砂と水に飲まれてゆく。人の業が巡り巡って返った瞬間だった。

明朝、灰出村。そこにはただ半壊した村があるのみである。大半の建物や田畠を押し流し、ほんの僅かに残った土地を無常にも太陽は暖かく照らしていた。これが灰出村で伝えられた昔話。狐に憑かれた哀れな母親の物語。あれからもうかれこれ百年あまり。今では大規模な開発で土地は見違えるようだ。都心部のように活気づき、件の狐の社も町の片隅に忘れ去られていた。普遍な生活をおくる一人の青年が、興味本位で社に参り狐の娘を起こすまでは…

どれほどの眠りだっただろうか。

目覚めたときには、既に愛すべき場所は失われ。見知らぬ町と、見知らぬ人々は、無情にも時が過ぎた事だけを告げていた。

——あゝまったく…数奇な運命じやのう…
なんにせよ…起こされたままでは道理が通らぬ。
…どれ、ひとつ訪ねてみるとするかの。

石畳にぴょんと飛び降りると髪飾りの鈴がりいんと鳴り、心地の好い風が頬を撫でる。

吹き抜ける風は…どこか懐かしい匂いがした。

